

よだかの星

宮沢賢治



よだかは、実にみにくい鳥です。

顔は、ところどころ、味噌みそをつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけています。

足は、まるでよぼよぼで、一間いっけんとも歩けません。

ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、いやになつてしまふという工合ぐあいでした。

たとえば、ひばりも、あまり美しい鳥ではありませんが、よだかよりは、ずっと上だと思つていましたので、夕方など、よだかにあうと、さもさもいやそうに、しんねりと目をつぶりながら、首をそつ方ほへ向けるのでした。もつとちいさなおしゃべりの鳥などは、いつでもよだかのまつこうから悪口をしました。「ヘン。又また出て来たね。まあ、あのざまをござらん。ほんとうに、鳥の仲間のつらよごしだよ。」

「ね、まあ、あのくちのおおきいことさ。きつと、かえるの親類か何かなんだよ。」

こんな調子です。おお、よだかでないただのたかならば、こんな生なまはんかのちいさい鳥は、もう名前を聞いただけでも、ぶるぶるふるえて、顔色を変えて、からだをちぢめて、木の葉のかげにでもかくれたでしょう。ところが夜だかは、ほんとうは鷹たかの兄弟でも親類でもありませんでした。かえつて、よだかは、あの美しいかわせみや、鳥の中の宝石のような蜂はちすずめの兄さんでした。蜂すずめは花の蜜みつをたべ、かわせみはお魚を食べ、夜だかは羽虫をとつてたべるのでした。それによだかには、するどい爪つめもするどいくちばしもありますでしたから、どんなに弱い鳥でも、よだかをこわがる筈はずはなかつたのです。

それなら、たかという名のついたことは不思議なようですが、

これは、一つはよだかのはねが無暗むやみに強くて、風を切つて翔かけるときなどは、まるで鷹のように見えたことと、も一つはなきごえがするどくて、やはりどこか鷹に似ていた為ためです。もちろん、鷹は、これをひじょうに気にかけて、いやがつていました。それですから、よだかの顔さえ見ると、肩かたをいからせて、早く名前をあらためろ、名前をあらためろと、いうのでした。

ある夕方、とうとう、鷹がよだかのうちへやつて参りました。

「おい。居るかい。まだお前は名前をかえないのか。ずいぶんお前も恥はじ知らずだな。お前とおれでは、よつほど人格がちがうんだよ。たとえばおれは、青いそらをどこまででも飛んで行く。おまえは、曇くもつてうすぐらい日か、夜でなくちや、出て来ない。それから、おれのくちばしやつめを見る。そして、よくお前のとくらべて見るがいい。」

「鷹さん。それはあんまり無理です。私の名前は私が勝手につけたわけではありません。神さまから下さったのです。」

「いいや。おれの名なら、神さまから貰もらったのだと云いつてもよかろうが、お前のは、云わば、おれと夜と、両方から借りてあるんだ。さあ返せ。」

「鷹さん。それは無理です。」

「無理じゃない。おれがいい名を教えてやろう。市蔵いちぞうというんだ。市蔵とな。いい名だろう。そこで、名前を変えるには、改名の披露ひろうというものをしないといけない。いいか。それはな、首へ市蔵と書いたふだをぶらさげて、私は以来市蔵と申しますと、口上くわじょうを云つて、みんなの所をおじぎしてまわるのだ。」

「そんなことはとても出来ません。」

「いいや。出来る。そうしろ。もしあさつての朝までに、お前

がそうしなかつたら、もうすぐ、つかみ殺すぞ。つかみ殺してしまうから、そう思え。おれはあさつての朝早く、鳥のうちを一軒けんずつまわつて、お前が来たかどうかを聞いてあるく。一軒でも来なかつたという家があつたら、もう貴様もその時がおしまいだぞ。」

「だつてそれはあんまり無理じゃありませんか。そんなことをする位なら、私はもう死んだ方がましです。今すぐ殺して下さい。」

「まあ、よく、あとで考えてごらん。市蔵なんてそんなにわるい名じゃないよ。」鷹は大きなはねを一いっぺい杯はひにひろげて、自分の巢すの方へ飛んで帰つて行きました。

よだかは、じつと目をつぶつて考えました。

（一たい僕は、なぜこうみんなにいやがられるのだろう。僕の

顔は、味噌をつけたようで、口は裂^さけてるからなあ。それだつて、僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない。赤ん坊ぽうのめじろが巢から落ちていたときは、助けて巢へ連れて行つてやった。そしたらめじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでもとりかえすように僕からひきはなしたんだなあ。それからひどく僕を笑つたつけ。それにああ、今度は市蔵だなんて、首へふだをかけるなんて、つらいはなしだなあ。

あたりは、もううすくなくなっていました。夜だかは巢から飛び出しました。雲が意地悪く光つて、低くたれています。夜だかはまるで雲とすれすれになつて、音なく空を飛びまわりました。

それからにわかによだかは口を大きくひらいて、はねをまっすぐに張つて、まるで矢のようにそらをよこぎりまわりました。小さ

な羽虫が幾匹いくひきも幾匹もその咽喉のどにはいりました。

からだがつちにつくかつかないうちに、よだかはひらりとまたそらへはねあがりました。もう雲は鼠色ねずみいろになり、向うの山には山焼けの火がまつ赤です。

夜だかが思い切つて飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたように思われます。一疋ひきの甲虫かぶとむしが、夜だかの咽喉にはいつて、ひどくもがきました。よだかはすぐそれを呑みのこみましたが、その時何だかせなかがぞつとしたように思いました。

雲はもうまつくろく、東の方だけ山やけの火が赤くうつつて、恐ろしいおそようです。よだかはむねがつかえたように思いながら、又そらへのぼりました。

また一疋の甲虫が、夜だかののどに、はいりました。そしてまるでよだかの咽喉をひつかいてばたばたしました。よだかは

それを無理にのみこんでしまいました。その時、急に胸がどきつとして、夜だかは大声をあげて泣き出しました。泣きながらぐるぐるぐるぐる空をめぐったのです。

（ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向うに行つてしまおう。）
 山焼けの火は、だんだん水のように流れてひろがり、雲も赤く燃えているようです。

よだかはまっすぐに、弟の川せみの所へ飛んで行きました。きれいな川せみも、丁度起きて遠くの山火事を見ていた所でした。そしてよだかの降りて来たのを見て云いました。

「兄さん。今晚は。何か急のご用ですか。」

「いや、僕は今度遠い所へ行くからね、その前一寸ちよつとお前に遭あいに来たよ。」

「兄さん。行っちゃいけませんよ。蜂雀はちすずめもあんな遠くにいるん

ですし、僕ひとりぼっちになつてしまふじゃありませんか。」

「それはね。どうも仕方ないのだ。もう今日は何も云わないで呉くれ。そしてお前もね、どうしてもとらなければならぬ時のほかはいたずらにお魚を取つたりしないようにして呉れ。ね、さよなら。」

「兄さん。どうしたんです。まあもう一寸お待ちなさい。」

「いや、いつまで居てもおんなじだ。はちすずめへ、あとでよろしく云つてやつて呉れ。さよなら。もうあわないよ。さよなら。」

よだかは泣きながら自分のお家へ帰って参りました。みじかい夏の夜はもうあけかかつていました。

羊齒しだの葉は、よあけの霧きりを吸つて、青くつめたくゆれました。よだかは高くしきしきしきしと鳴きました。そして巣の中をきちんとかたづけ、きれいにからだ中のはねや毛をそろえて、また巣から飛び出しました。

霧がはれて、お日さまが丁度東からのぼりました。夜だかはぐらぐらするほどまぶしいのをこらえて、矢のように、そつちへ飛んで行きました。

「お日さん、お日さん。どうぞ私をあなたの所へ連れてつて下さい。灼やけて死んでもかまいません。私のようなみにくいからだでも灼けるとときには小さなひかりを出すでしょう。どうか私を連れてつて下さい。」

行つても行つても、お日さまは近くなりませんでした。かえつてだんだん小さく遠くなりながらお日さまが云いました。

「お前はよだかだな。なるほど、ずいぶんつらからう。今度そらを飛んで、星にそうたのんでごらん。お前はひるの鳥ではないのだからな。」

夜だかはおじぎを一つしたと思いましたが、急にぐらぐらしてとうとう野原の草の上に落ちてしまいました。そしてまるで夢ゆめを見ているようでした。からだがずうつと赤や黄の星のあいだをのぼつて行つたり、どこまでも風に飛ばされたり、又鷹が来てからだをつかんだりしたようでした。

つめたいものがにわかには顔に落ちました。よだかには眼めをひらきました。一本の若いすすきの葉から露つゆがしたたつたのでした。もうすっかり夜になって、空は青ぐろく、一面の星がまたたい

ていました。よだかはそらへ飛びあがりました。今夜も山やけの火はまつかです。よだかはその火のかすかな照りと、つめたいほしあかりの中をとびめぐりました。それからもう一ぺん飛びめぐりました。そして思い切つて西のそらのあの美しいオリオンの星の方に、まつすぐに飛びながら叫さけびました。

「お星さん。西の青じろいお星さん。どうか私をあなたのところへ連れてつて下さい。灼けて死んでもかまいません。」

オリオンは勇ましい歌をつづけながらよだかなどはてんで相手にしませんでした。よだかは泣きそうになつて、よろよろと落ちて、それからやつとふみとまつて、もう一ぺんとびめぐりました。それから、南の大犬座の方へまつすぐに飛びながら叫びました。

「お星さん。南の青いお星さん。どうか私をあなたの所へつれ

てつて下さい。やけて死んでもかまいません。」

大犬は青や紫むらさきや黄やうつくしくせわしくまたたきながら云いました。

「馬鹿を云うな。おまえなんか一体どんなものだい。たかが鳥じゃないか。おまえのはねでここまで来るには、億年兆年億兆年だ。」そしてまた別の方を向ききました。

よだかはがっかりして、よろよろ落ちて、それから又二へん飛びめぐりました。それから又思い切つて北の大熊星おおぐまほしの方へまっすぐに飛びながら叫びました。

「北の青いお星さま、あなたの所へどうか私を連れてつて下さい。」

大熊星はしずかに云いました。

「余計なことを考えるものではない。少し頭をひやして来なさい。」

い。そう云うときは、氷山の浮ういている海の中へ飛び込こむか、近くに海がなかったら、氷をうかべたコップの水の中へ飛び込むのが一等だ。」

よだかはがっかりして、よろよろ落ちて、それから又、四へんそらをめぐりました。そしてもう一度、東から今のぼった天あまの川の向う岸の鷺わしの星に叫びました。

「東の白いお星さま、どうか私をあなたの所へ連れてつて下さい。やけて死んでもかまいません。」

鷺わしは大風おおふうに云いました。

「いいや、とてもとても、話にも何にもならん。星になるには、それ相応の身分でなくちやいかん。又よほど金もいるのだ。」

よだかはもうすっかり力を落してしまつて、はねを閉じて、地に落ちて行きました。そしてもう一尺で地面にその弱い足が

つくというとき、よだかは俄かにのろしのようにそらへとびあがりました。そらのなかほどへ来て、よだかはまるで鷲が熊を襲うときするように、ぶるつとからだをゆすつて毛をさかだてました。

それからキシキシキシキシッと高く高く叫びました。その声はまるで鷹でした。野原や林にねむつていたほかのとりは、みんな目をさまして、ぶるぶるふるえながら、いぶかしそうにほしぞらを見あげました。

夜だかは、どこまでも、どこまでも、まつすぐに空へのぼつて行きました。もう山焼けの火はたばこの吸殻のくらいにしか見えません。よだかはのぼつてのぼつて行きました。

寒さにいきはむねに白く凍りました。空気がうすくなつた為に、はねをそれはそれはせわしくうごかさなければなりません。

でした。

それなのに、ほしの大きさは、さつきと少しも変わりません。つくいきはふいごのようです。寒さや霜しもがまるで剣のようによだかを刺さしました。よだかははねがすっかりしびれてしまいました。そしてなみだぐんだ目をあげてもう一ぺんそらを見ました。そうです。これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちていっているのか、のぼっているのか、さかさになっているのか、上を向いているのかも、わかりませんでした。ただこころもちはやすらかに、その血のついた大きなくちばしは、横にまがっては居おりましたが、たしかに少しわらって居おりました。

それからしばらくたつてよだかははつきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま燐りんの火のような青い美しい光になって、しずかに燃えているのを見ました。

すぐとなりは、カシオピア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになっていました。

そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。

今でもまだ燃えています。

よだかの星

底本：新潮文庫『新編 銀河鉄道の夜』

1989（平成元）年 6 月 15 日第 1 刷発行

1991（平成 3）年 3 月 10 日 4 刷

親本：『新修 宮沢賢治全集』筑摩書房

入力：佐々木美香

校正：野口英司

1998 年 8 月 20 日公開

1999 年 7 月 23 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作に
あたったのは、ボランティアの皆さんです